分野別研究組織成果報告（2007年度）

近代への胎動　―　中世末期・英訳聖書の受容

Towards the New Era: Reception and Dissemination of English Biblical Translations at the End of the Middle Ages.

田口　まゆみ（TAGUCHI Mayumi）

１．Cambridge大学、St John's College所蔵MS G. 31に収録されている*Historye of the Patriarks*のエディション刊行（*The Bible Historiale*（*Historia Scholastica*中世仏語訳と「13世紀仏語聖書」のconflation）の創世記部分のエディションを含む）

*Historye of the Patriarks*は、ペトルス・コメスタによる聖書の注釈書*Historia Scholastica*の創世記対応部分の英訳に、原典にはない聖句の英訳を補ったものである。組み込まれた聖書は、パラフレーズされた箇所を含めて創世記の大部分をカバーしている。写本の製作時期は15世紀末、翻訳時期は15世紀後半以降と考えられる。聖書の英語訳が厳しく禁じられていた時代の稀有な作品であることから、ドイツ、ハイデルベルグ大学出版局Universitätsverlag, Winter出版による*Middle English Texts*（MET）シリーズからの刊行約束を得て、2004年にスタートしたプロジェクトである。2007年夏、完成原稿をエディターに提出したが、これについての返事を受け取ったのが2008年５月であり、その後修正版を８月に提出し、現在最終調整に入っている。刊行予定は2009年前半である。

［本書の構成］

LIST OF PLATES　vi
ACKNOWLEDGEMENTS　vii
ABBREVIATIONS　ix
INTRODUCTION
1. The Text　xi
2. Manuscript Description　xiii
3. Language　xvi
4. The Bible in the Vernacular in the Fifteenth Century　xviii
5. Method of Translation and the Sources　xxv
5. 1 The *Historia Scholastica* and the *Bible Historiale*　xxvi
5. 2 The Vulgate and the Wycliffite Bible　xxxii
5. 3 Other Additions　xxxviii
6. Authorship and Patronage　xliii
7. Editorial Policy　1
TEXT OF THE *HISTORYE OF THE PATRIARKS* WITH

PARALLEL TEXTS OF THE *HISTORIA SCHOLASTICA*
AND THE *BIBLE HISTORIALE* 1
COMMENTARY ON THE *HISTORIA SCHOLASTICA*
AND THE *BIBLE HISTORIALE* 275
COMMENTARY ON THE *HISTORYE OF THE PATRIARKS* 315
GLOSSARY 335
BIBLIOGRAPHY 349

２．学会発表

"Visual Representation in Nicholas Love's *Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ*: Mind, Heart, and Body — 'gostly felynges' & 'stirynges'", Visual Representations of Medieval Spirituality (York, 2007, July)

15世紀は一般的に文化的に不活発な時代としてとらえられてきた。しかし、宗教改革、ルネサンス、ヨーロッパの世界への進出といった、16世紀における人間性の開放・開花は、決して突然、無から生まれたわけではない。例えば近・現代ヨーロッパの核とも言える個人主義の発達は、信仰がキリストの生涯の黙想という方法によって内に向かい、個人のものとなっていったことがきっかけとなったと考えられる。キリストの生涯の黙想は、14世紀に発達し、Nicholas Loveによる『イエス・キリストの尊い生涯の鏡』(*Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ*) (1410年ごろ) によって、15世紀を通し、広い層の人々に広がり、影響を与えた。

本稿は、Nicholas Loveによるこの作品 (そして、その種本となった偽ボナヴェンチュラ作『キリストの生涯の黙想』(*Meditationes Vitae Christi*) に特徴的な、感情を鼓舞する語句を最近の脳神経学分野における発見、特にAntonio Damasioの理論にもとづき分析し、それらの語句が読者に与えたと考えられる影響について議論している。

認知科学、脳神経学を文学批評に適用することはまだ広く行われておらず、特に中世文学の領域では前例がないので批判も覚悟であったが、学会発表での反応は良好であり、今年も関連の研究を国際学会で発表した (International Conference on Middle English, at Cambridge, England)。現在、この２編をもとに研究論文を執筆中である。